

ドイツ神秘主義叢書 12

キリスト教についての対話

ヴァレンティン・ヴァイゲル

山内 貞男 訳

付

ヨハン・アルント

真のキリスト教について



創文社

ヴァレンティン・ヴァイゲル

キリスト教についての対話

ヨハン・アルント

付 真のキリスト教について

山内貞男 訳

創文社

山内 貞男 (やまうち・さだお)

1930年(昭和5年)、京都市に生まれる。大阪外国語大学ドイツ語学科を経て、京都大学大学院文学研究科博士課程宗教学専攻単位取得。桃山学院大学講師、助教授、教授を経て、現在龍谷大学教授、宗教哲学(ドイツ神秘思想)専攻、文学博士。

著書：近世初期ドイツ神秘主義研究(私家版)。主要論文：『ドイツ神学』における地獄(1)・(2)——「キリストの生」との関わりにおいて——、V. ヴァイゲルにおける「キリストの死」、翻訳：(著者不詳)『ドイツ神学』(ドイツ神秘主義叢書10)(創文社)、E. ペンツ「キリスト教神秘主義における永遠の若さ」(エラノス叢書2 時の現象学II)(平凡社)。

〔キリスト教についての対話〕〔ドイツ神秘主義叢書 12〕

訳者との申し合せにより検印省略

曉印刷・鈴木製本

一九九七年四月二〇日 一九九七年四月二十五日	第一刷印刷 第二刷発行	訳者	山内 貞男
	発行者	久保 井 浩 俊	
	印刷者	安 達 精 治	
発行所	株式会社	創 文 社	
振替	〇〇二〇〇一九二四七二		
電話	〇三―三二六三―七一〇一		
	〒東京都千代田区麹町二―六―七		

ISBN4-423-39606-8

Printed in Japan

凡 例

凡 例 (キリスト教についての対話／真のキリスト教について)

- 一 本書には、ヴァイデルの *Dialogus de Christianismo* 『キリスト教についての対話』全訳と、アムントの *Vom wahren Christenthum* 『真のキリスト教について』抄訳とを収めた。
『キリスト教についての対話』は、ヴァイデルの全集版(未完)第四分冊、Valentin Weigel: *Dialogus de Christianismo* (1584), herausgegeben von Alfred Ehrenreich, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1967 (Valentin Weigel: *Sämtliche Schriften*, herausgegeben von Will-Erich Peuckert und Winfried Zeller, Friedrich Frommann Verlag (Günther Holzboog, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962—4. Lieferung) を底本と)、『真のキリスト教について』は、一十六五年のユーン版、Johann Arndt: *Sechs Bücher Vom wahren Christenthum*. Biel (Bey Johann Christoph Heilmann) 1765. を底本とした。
- 一 他に、『キリスト教についての対話』に関しては、ヴォルガスト編現代語訳選集、Valentin Weigel: *Ausgewählte Werke*, herausgegeben von Siegfried Wollgast (*Texte zur Philosophie- und Religionsgeschichte*) Union Verlag Berlin, 1977; Stuttgart 1978. を、また『真のキリスト教について』に関しては、一七八三年のチャーリン版、Johann Arndt: *VI Geistreiche Bücher Vom wahren Christenthum*. Zürich (gedruckt in Bürcklischer Truckerey) 1783. を参照した。
- 一 『キリスト教についての対話』は全訳であるが、浩瀚な『真のキリスト教について』の方は、その極く僅かな一部の抄訳を、前者の付録のような形で収めざるを得なかった。
- 一 本文中の訳文や訳語について、訳者が補足ないし説明を付け加える場合には、これを括弧「」によって示した。
- 一 本文については、原文においてほとんど節区分がないところに、読み易くするため、便宜的に訳者による節区分を

設定し、それを*印によって明示した。

一 「キリスト教についての対話」底本では、「序章」と題する独立の章はないが、第一章に先立つ「この世における三人の最も主要な人物についての説明」部分がそれに相当するところから、本訳書ではこれを「序章」として扱う。

一 同底本では「付録」中に収められている「この対話における章ないし順序」部分を、本訳書では「目次」として挙げている。

一 「キリスト教についての対話」については、底本の全集版編者註に収められている三種類ある「写本・刊本の欄外に記入されていた原註」は、聖書の出典指示に関する限り、すべて本訳書の「原・編者註」に取り上げたが、編者自身の註で異本校合関係のものは、本訳書の性格から不必要と判断し、ほとんど取り上げず、人名や事項関係のものの中に訳出した。

一 「原・編者註」において、「原註」に編者が補足や説明を加えている場合には、これを括弧へゝに入れた。また「編者註」に訳者が補足・説明を付加する場合には、括弧へゝによって、これを明示した。

一 「原・編者註」に聖書の出典指示・参照がある場合は、参考の便宜上、その都度具体的に当該箇所を、訳者による括弧へゝを用いて挙げた。

一 「キリスト教についての対話」に関する「訳註」は、本文に関する訳註と「原・編者註」に関する訳註として、別個に明記してまとめた。

一 先に挙げたヴォルガスト編現代語訳『ヴァレンティン・ヴァイゲル選集』中の『対話』に付された「註」を、本文の内容理解に資するため、必要に応じて本「訳註」内に採り上げ、これを◆によって明示した。

一 「訳註」において人名についての説明には、『対話』の内容上必要な限り『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局）を大幅に借用ないし援用した。その際、訳者による語句の異同や追加等があるが、記述全体の責任は訳者にある。

凡 例（キリスト教についての対話／真のキリスト教について）

- 一 本文中の聖書からの引用については、訳出の際、『新共同訳聖書』を参照してそれに拠ることを原則としたが、ヴァイゲルとアルント両底本の原文を尊重した。そして表記については、訳者の方針に従った。
- 一 外国の地名と人名の表記は、原則として慣用を尊重しながら、訳者の方針に従った。

目次

凡例

ヴァレンティン・ヴァイゲル

「キリスト教についての対話」(全訳)

登場人物一覧／詳細標題

序章 この世における三人の最も主要な人物についての説明。

第一章 聴聞者は、キリストにより神と本質的に合一されていることを喜ぶが、説教者はこれを迷誤と認め、非難した。

第二章 聴聞者は説教者と、義の婦負の正しい意味について、またいかにしてすべて説教することは、塗油すなわち内的な言葉ないし聴受なしでは無駄であるかについて討論するが、説教者は、それも狂信、と手厳しく批判する。

第三章 キリストの死はわれわれの生である故、われわれにおけるキリストの死によって肉を殺すことが、不可欠であること。説教者はしかし、帰された義によることなく、外からのキリストの死に甘んじる。

v

七

九

一六

三四

四九

第四章 ここに死が、聴聞者の見解と教説を正しいと保証する。それによって説教者は、

内的な言葉ないし聴受の否定から生じる甚大な損害を、納得させられる。……………七

第五章 ここでは今一度、死、説教者および聴聞者が語り合い、そして神の人間における必然的な本質的内住は、異端的でも、オジアンダー的でもなく、使徒的であり、預言者的であることが、証明される。……………六

第六章 いかにして、十字架ないしキリストの受難と死が、すべての人びとにおいて空虚にされ否定されるかということ、および十字架につけられた方・キリストを誰一人として説教壇から説教していないということ。その原因となっているのは、外から帰された義である。……………二〇

第七章 説教者は懺悔告白して亡くなる。聴聞者の弟たち、すなわちヨハネスとパウルスは、説教者が、その自分の純粹な教説を固守しているが無駄であったということと、死に往く者は誰でも、三つのことを放棄しなければならないことを、認める。……………二四

第八章 聴聞者は、牧師も立ち会わず、懺悔告白も罪の赦しも礼典もなく死去し、野原に埋葬されるが、彼の弟たち、ヨハネスとパウルスはそのことを大変ひどく悲しむ。死は彼らを慰める。……………三

第九章 説教者が野原で、この弟たちに姿を現わし、死と並んで、自分は暗闇のなかにいるが、聴聞者の方は光のなかにいる、と証言する。また、あの世がこの世の

なかにかにしているか、あの世についての報告もなされる。	二六
付 録 「対話の著者から読者へ」	一三七
「すべての生けるものの結末である死より、すべてのものへ」	一三九
「師父たちの伝記から 死は甘美な眠りであること」	一四〇
原・編者註	一四三
訳者註 (本文に関する／原・編者註に関する)	一四三
ヨハン・アルント	
「真のキリスト教について」 (抄訳)	
序文 キリスト教徒の読者へ。	二二
第一巻第一章 人間における神の像とは何か。	二九
第一巻第十一章 自分の生においてキリストに従わない者は、真の悔い改めをなさず、キリスト教徒ではなく、神の子ではない。また新たな誕生およびキリストの軛 くびき とは何であるか。	三五
第二巻第六章 キリストとの合一に人間の完全性と至福があるが、そこへ至るには人間は何一つなし得ず、むしろ、自分の悪しき意志によって自ら神の恵みを妨げている。しかしキリストは、われわれにおいて独りですべて	

をなされる。……………三三

第二卷第十章 真の悔い改めの四つの特性について……………二四〇

訳者註（本文に関する）……………二四九

解説……………二五五

後記……………三〇一

文献目録……………四八

索引（固有名・事項）……………一

1
47

48
57

三〇一

二五五

キリスト教についての対話
（ヴァレンティン・ヴァイゲル）
付 真のキリスト教について
（ヨハン・アルント）

ヴァレンティン・ヴァイゲル

キリスト教についての対話

(一五八四年／一六一四年)

DEUTSCHES CHRISTENTUM

Das ist

Die Ehrscheif der Gerechtigkeit und der
 und Altruismus oder der Gerechtigkeit der
 menschlichen Gerechtigkeit vor dem in der
 Welt, von der Gerechtigkeit und der
 Gerechtigkeit der Gerechtigkeit.



DIALOGVS DE CHRISTIANISMO

das ist

Ein Christliches Hochwichtiges nottwendiges Colloquium oder
gespreche dreyer furnembsten hiestehenden personen in der
Weltdt, von der Seiligmachenden Eynigung des menschen mit
Gott

Auditor Mors Concionator

「キリスト教についての対話」

すなわち

ここに、この世の三人の最も主要な人物による人間の神との、救いをもたらす合一についての、キリスト教の非常に重要な必須の討論ないし対話

聴聞者 死 説教者
(二)

登場人物一覽

- 1 死
- 2 聴聞者
- 3 説教者
- 4 ヨハネス
「聴聞者の
二人の弟」
- 5 パウルス
- 6 副牧師
- 7 ベルンハルドゥス博士

詳細標題

キリスト教についての対話

すなわち

いかにして人間が、神から教えを受け、
神の中から再び生まれ、